

側に寄り添う看護

2年生の夏、初めて患者さんを受け持った実習でのことである。

受け持たせていただいた患者さんはAさん(70歳代男性)、肝がん・肺転移を患い、入院していた。Aさんは食事を摂ることもほとんどできず、一人で起き上がることも困難であり、1日のほとんどをベッド上で過ごしていた。初めて挨拶に伺った際には、無愛想な話し方だったが、毎日関わっていく中で、自分や家族の話など様々な話をしてくださった。実習期間1週目は最後の望みである1種類の抗がん剤に耐えられる体力を戻すことを目標とし療養生活を送っていた。Aさんはゼリーしか口にできず、栄養状態もなかなか改善しないまま経過していた。それでも起き上がる際の援助や食べられそうな物を聞き、その情報を管理栄養士さんに伝え、少しでも体力を戻せるよう、関わってきた。Aさんは体力が落ち、一人で起き上がるのが困難であってもトイレだけは自分の足で歩いていくと頑なに援助を拒んでいた。そこには自分で食べることを、トイレに行くことを出来なくなった時には、もう終わりだというAさんの思いがあった。私は少しでもAさんの力になりたいと思い、何かできることはないかと尋ねた。Aさんは「君は何か手伝うことをしなければならぬと思っている。手伝ってほしいと言えば言うし、できなくても自分でやりたいこともある。」と言い、その言葉に強く心打たれた。私は患者さんの助けになりたいと考え、声をかけたつもりだったが、それは患者さんにとって善意の押し付けでもあることに気付いた。

土日を挟んで実習期間2週目の月曜日、Aさんの病室を訪室すると、部屋の電気は消され、カーテンは閉められ、全ての光が遮断されている環境だった。先週との様子の違いに驚きながらも挨拶すると、普段は話が続くところが「うん。」と言しか返答がなかった。Aさんの容体は土日で悪化し、最後の抗がん剤も使えない状態になってしまっていた。周囲の刺激を遮断するかのよう1日を過ごしていたAさんに、私は何もできない自分が悔しく、泣いた。私はAさんに以前言われた言葉を思い出し、病室へ訪室し、側にいて手を握っていてもいいか聞き、Aさんに同意を得て毎日部屋を訪ねた。ある日突然、訪室するとテレビがつき、枕元の電灯が点いていた。「ありがとうございます。毎日手を握って隣にいてくれて。一人であるのが不安で死ぬのが怖かった。君のおかげで気持ちの整理がすこしできたよ。」とAさんは声をかけてくださった。私は自分が何も看護をできていないと感じていたが、Aさんの言葉に救われた。Aさんとの関わりから、何か援助や技術を行うことだけが看護ではない。患者さんの側にいること、心の支えとなることも看護であることに気付いた。Aさんの言葉がなければ私は看護の大切さに気付くことはできなかつたろう。この経験は一度も忘れられない。これからの自己の看護観の基礎として成長させていきたい。